



Title	大判小判がざくざく : 連環画『沈万山』の魅力について
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 2, 2-15
Issue Date	2013-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98388
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98388
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_2_2-15.pdf



大判小判がざっくざく ——連環画『沈万山』の魅力について

加部 勇一郎

沈万山と聚宝盆

本稿は、沈曼雲（1911-1978）によって生み出された連環画『沈万山』（図1）を取り上げ、物語を概観した上で、その魅力を語り述べるものである¹。

本題に入る前に、まず、沈万山についてと、彼を主題にした文芸を概観したい。それはまた、後に取り上げる連環画が、あまたある「沈万山モノ」の一つに過ぎないことを確認する作業でもあるだろう。

沈万山は、元から明の時代にかけて実在した、ある金持ちの呼び名である。名をもと富（一説に秀）といい、字を仲榮という。当時金持ちのことを“万戸”といい、彼の排行が三番目だったから、“万三”と呼ばれるようになった。“万山”とも記されるのは、呉地方において“三”と“山”が同音であることからのものだろう。父親の沈祐が湖州から周荘に移って来て以来、その一族は蘇州や南京などの地に、広く居を構えていった。周荘に今も残る沈庁なる屋敷は、彼の子孫が乾隆年間に建てたものと言われている。彼の財力は、帝王をも凌ぐほどであったといわれ、明の太祖朱元璋が都を金陵、いまの南京に置いたとき、都城を築く費用を援助したことで知られている。そんなわけで、彼を語る際に「金持ちである」ことは、欠くことのできない要素である。

超越的な人が現れたとき、人々は、その人がなぜその超越性を手に入れたのかについて、語らずにはいられない。だから「金持ちである」沈万山について語るとき、その着眼点は往々にして「なぜ彼は金持ちになったか」という点に置かれる。この点について、朱恒夫氏は「関于沈万三的叙事文学考論」の中で、以下の四つの説を提示する。一つには、父親が不毛の地をうまい方法で耕した功績によるというもの（〔明〕田芸衡『留青日札』巻35）。一つには、海外との貿易によるというもの（〔清〕『吳江県志』）。一つには、金を掘り当てたことによるというもの（〔明〕呂毖『明朝小史』



図1 連環画『沈万山』表紙

卷 2)。そして一つには、^{しゅうほうぼん}聚宝盆を得たことによるというもの（〔明〕謝肇淛『五雜組』卷 3、〔清〕『堅瓠餘集』卷 2「聚宝盆」）。これら四つの説の中では、この聚宝盆のバージョンこそが、最も広範に流布したものであるらしい。それは例えば次のようなものだ。

明初の沈万山がまだ貧しかった頃のこと、ある晩、青い服を着た百余りの人が、自分に何か頼むのを夢に見た。朝になり、魚取りの老人がカエルを百余り持っているのを見、そしてそれらをさばくと聞くと、昨晚の夢を思い出し、そのカエルを買い取り池に放してやった。のちにやかましい鳴き声が朝まで続いて、寝つかれないことがあったが、明け方に追い払いに往くと、それらが^{すえ}陶の^{はち}盆一つに輪を成してうずくまっていた。不思議に思い、盆を手にして帰り、手を洗う道具として使っていた。

初めは^{ほうもつ}宝物であるとはわからず、万山の妻はそれを使って洗濯していたが、中に銀のハンコ（原文〈銀記〉）を残した折に、程なくして見てみれば、中は銀のハンコで溢れ、数え切れないほどになっていた。金や銀で試してみても、同様になった。彼はこうして財力が天下第一となったのであった。

——〔清〕褚人穫『堅瓠餘集』卷 2
の引く『挑灯集異』より梗概²



図2 朱仙鎮年画「揺銭樹」

聚宝盆というのは、字義から言えば“宝を^{あつ}はち^{はち}聚める盆”のことだが、集積させる容れ物というよりは、金銀などを少量仕込んでおけば、後ほど溢れんばかりに増えている、そんな容れ物らしい³。聚宝盆という語じたいは、明代の何孟春の文章に見えるから、明の中



図3 楊柳青年画「文武財神一堂聚会」
（画面手前中央に二人の童子を挟んで左に沈万山、右に石崇）

頃にはすでに普通に使われていたことと思われる。

民間の版画に沈万山が登場するとき、聚宝盆に加えて^{ようせんじゅ}揺銭樹（金の成る木）までもが組み合わされる（図 2）。また、財神と同等の存在として、同一画面に描かれたりもする（図 3）。これら聚宝盆・揺銭樹・財神などのモチーフが、人々の^{フアーツマイ}〈発財〉（金を儲けること）への願いに結びついていることは言うまでもなく、それらと併置される沈万山はまた、彼らの祈りを引き受けるにふさわしい、まことめでたい存在とも言えるのである。

聚宝盆の凋落

この聚宝盆なるもの、魔法の道具ともいえる代物なのだが、はなしというものは普通、この種のアイテムが登場することで、一段レベルが変わるものだ。今のぼくらは、こういう物語を聞くと、ああオハナシなんだと、ちょっと距離を置くことになっている。しかし当時^{まこと}にあつてこのアイテムは、次のように真らしく語られもする。

金陵の南門を聚宝門という。伝えるところでは、洪武の初に沈万三が築いたものという。沈の富は江南第一で、太祖が東南の諸城を築かせたとき、西北の城はまだ完成していなかったのに、沈の工事はもう終わっていたのである。

太祖はしばしば沈を殺そうと思った。「あの家には聚宝盆があるので、富を招くことができるのだ」と人がいっていた。沈はそれで、盆を城門の下に埋めて、それによって王気を鎮めたのだ、と世間にいいふらし、だから聚宝門と名付けたのだという。

（〔明〕謝肇淛『五雜俎』巻 3、岩城秀夫訳からの引用）⁴

この明末の記事からうかがえるのは、明初の金持ちで知られる沈が、聚宝盆なる魔法のアイテムを所有していたと、すでに一部の人々に思われていたことである。そして、それが理由で帝王に命を狙われていたことと、身の安全を守るために盆を手放したらしいことである。実のところこの門名は、門近くにある^{めのう}瑪瑙を生む^{おか}雨花台なる岡、別名聚宝山にちなんで名付けられたとのことで、沈の盆とは無関係なのだろう（注 1 清水論文参照）が、少なくとも謝肇淛の書きぶりからは、当時の人たちが聚宝盆の実在性について、それをハナから一笑に付してしまうぼくらよりは、まじめに考えていたらしいことがうかがえる。

時代が下ると、この沈万山の物語は、芝居の形でも楽しめるようになる。有名なものに、明清の間に生きた^{しゅこく}朱籬（1620?-1710?。字を素臣という）作『聚宝盆』（30 齣）がある。カエルの精から盆を贈られること、その盆によって沈万山が裕福になっていくことなどは、上に示した物語と同様で、新たに朱元璋とのやりとりが加えられ

る⁵。また後に、清代乾隆年間にも『天燧閣』^{てんすいかく}なる名の脚本が編まれる。これは朱の脚本を踏襲したものとされ、天燧閣は、沈が裕福になったあとに建てた建物の名前。

さらに下り、民国期以降には京劇の形で楽しまれるようになる。陶君知編著『京劇劇目初探 増訂本』^{タイトル}に見える「沈万三」なる劇目についての説明によれば、あらずじは以下のものであったという。

呉人沈万三、幼い頃に柳蔚文と婚約するも、長じて賭け事に溺れてしまう。岳父の柳もまた、沈万三のていたらくに乗り、沈家の財産を奪い取る腹積もりでいた。沈家の老僕が、柳の奸計に気づき、家産を埋め隠して柳蔚文の母の元へ馳せ参じると、事情を聞いた柳の母、娘の蔚文を男装させて外へ出し、沈に生活を正すよう勧告した。後に柳蔚文は、鄧遠志と李有義二人の助けを得、人を遣わし、わざと賭場にて沈万三をいたぶり、彼を苦境に立たせる。金^{かね}を失い世^{はかな}を儚^{はかな}んだ沈万山、自ら命を絶とうとするが、蔚文によって救われる。蔚文が沈に実情を告げると、沈は悔い悟り、その途端に、家の壁が崩れおち、彼はそこで聚宝盆を手に入れ、巨万の富を手に入れた。⁶

ここでぼくらは、ある重要な一点に気づかされる。ここでいう聚宝盆とは、沈家の老僕が、家産を悪者に取られないよう財宝を隠し埋めるための容れ物のことらしいということだ。それはもはや金銀を無限に産み出すマジカルアイテムとしてではなく、単に、一時的に人々の目を財宝から遠ざけるための、いわばタイムカプセルとして機能しているに過ぎない。同時にまた、「なぜ彼が金持ちになったのか」という、沈万山にふさわしいテーマもどこかへ行ってしまっていて、賭け事に溺れて落ちぶれていく金持ちの若者が、周囲の献身のおかげで自らの過ちに気づき、許嫁^{いいなづけ}とともに、まっとうな道を歩み直すという、ただの成長の物語に変わってしまったのである。

いつ、そしてなぜその力が無くなったのかについては、別稿に譲るとして、ここで確認したいのは、本稿で取り上げる連環画『沈万山』が、この流れに属するものであるということだ。聚宝盆から神秘性が取り払われ、物語もまた教訓めいたものになると聞いて、中にはがっかりした人もいるだろう。しかしこの連環画は、豊富に図版を付した点で、過去のものとは明らかに一線を画している。文字しかなかった物語に図像イメージが与えられることで、まったく別のものに変容してしまうなんてことは、ぼくらの映画やアニメーションと、まったく同じなのだが、描き手によって限定されるイメージが良質である点で、この作品には、新たな時代を生き抜くべき新たな命が、確かに吹き込まれていると言えるのである。

連環画『沈万山』の描き手

連環画『沈万山』を描いたのは、^{しんまんうん}沈曼雲（図4）という民国期に活躍した連環画家である⁷。彼は多作で知られ、その生涯に残した作品は二百点以上とも言われる。代表作に『済公伝』『十八羅漢収大鵬』『七箇紅面孔』『八箇黒面孔』などがある。当時の上海で連環画の製作に携わっていた人間は、およそ二百人ほどいたようだが、中に四つの流派があり、彼はその一派を束ねる代表的人物として知られる。彼と残る三人——^{ちようこうほん}趙宏本、^{せんしやうだい}銭笑呆、^{ちんこういつ}陳光鑑——とを合わせて「四大名旦」などと呼ぶこともある。



図4 沈曼雲

沈曼雲を取り上げた研究は、いまだ少ない状況にあるが、ここで、一可・未明・王軍著『小人書の歴史——漫談中国連環画百年興衰』と、沈の弟子の^{りやうとう}凌濤によって描かれた回憶「憶沈曼雲老師」に従って、沈がどんな人物であったか、見ていくことにしよう。

沈曼雲は、1911年、上海呉淞の商人の家に生まれた。幼いときに両親と死に別れたため、伯父によって育てられた。子どもの頃より、学校に通うかわら、独学で絵の練習をしていたようで、当時は、集めていた煙画や月份牌に描かれた図案や人物を模写したり、見てきた芝居などを紙に描き写したりしていたという。

沈は学校を出ると、伯父のいいつけでまちの漢方医のところへ修行に行った。しかし勉強の合間にこっそり絵を描いているのを師匠に見つかってしまう。その一件がほどなくして伯父の耳に入ると、伯父は怒り心頭に発し、沈曼雲に、正業につかないなら家を出よう言った。彼はそこで、泣く泣く伯父の家を出、上海閘北の北公益里の知り合いのところへ身を寄せて、自活する道を選ぶことになった。

北公益里は当時、連環画の出版が盛んな地域で、本屋が林立していた。沈曼雲はここで、有名な連環画家である^{りゅうはくりやう}劉伯良と出会うことになる。前掲『小人書の歴史』は、沈と劉の二人を、師弟の関係にあったといい、劉の指導のもとで沈は絵画の基礎を学んだと述べるが、凌は「先生が言うには」と前置きした上で、劉は沈にとって、連環画の出版の仲介の労を取ってくれた人物であると記している。凌の回憶を読む限り、沈はさほど苦労もせず連環画製作の道を歩んでいったかのようでもあるが、『小人書の歴史』は、そのあたりをやや丁寧述べている。それによれば、沈が連環画製作を始めたのは1928年、彼が18才の時であるが、読者に受け入れられる作品を描けるようになるまでには、なかなかの苦労があったらしい。しかし後に、変形や誇張といった手法を大胆に取り入れ、作品を滑稽な方面へ転向させたことが契機となって、人々に受け入れられるようになった。30年代に入ると、連環画を描いて売ることの

他、教室を開いて、後進の教育にも携わっていたようだ。

彼の特徴として、多作である点が挙げられるが、これは彼が、描くのが非常に速かったことに加え、創作スタッフを幾人か有し、作品製作に分業制を採用したことによる。具体的には、彼が主要な画面の構図と人物の絵を担当し、背景などは、仲間や弟子に代わりに描かせていたという。

1949年の上海の解放以降については、52年に上海市の文化局によって組織された連環画創作者研究班に入った後、歴史や文学などの知識を活かして図書館や文化館などに職を得た。新中国になってから彼が残した作品は、弟子の凌濤とともに描いた連環画『兩大心願』ただ一つであり、彼が他の作品を描かなかった理由について、それは、彼が長い間かけて会得した変形や誇張といった表現のスタイルと、新中国が要求する、写実を是とする画風や革命的な題材とが、合わなかったからではなかったか、と言われている。彼は60年代の末に文化館を退職し、家で晩年を過ごしていたが、1978年に脳溢血で倒れ、その68年の生涯を終えた。

『沈万山』の物語

連環画『沈万山』(図5)は、1940年代後半の初版と言われる。当時の沈曼雲は、30代後半である。全部で四百数十頁。物語は長い上に、登場人物も多い。構成がやや入り組んでいるものの、あらすじは複雑ではなく、ややこしさはまったく感じない。上に引いた京劇のあらすじと比べたとき、登場人物の名には異同があるが、全体の流れはおおむね同様であるから、あるいは



図5 沈万山と聚宝盆

は連環画は、京劇の強い影響下に生まれたものかもしれない。

ここで連環画版のあらすじを見ていくことにしよう。大きく四つの物語があり、それぞれ「沈万山の墮落」「鄧遠志の活躍」「柳織文の計略」「沈万山の改心」とまとめることができる。以下、それぞれの物語を大まかに述べるが、ややこしいと思われた方は、末尾に関係図を載せておいたから、適宜ご参照いただきたい。

沈万山の墮落：裕福な家に生まれた沈万山、もとは聡明な若者だったが、父親の死後、遊び人の王化雨・小陳に誘われるまま、女遊びと賭け事にうつつを抜かすようになる（図6）。一方、沈家の財産を狙う岳父柳子貞が、王・陳らと結託すると、彼らは沈家の財産を管理する沈高を煙たく思うようになる。沈家の凋落を憂う沈高は、沈家の再興を願って財産を庭へ埋め隠した。次いで柳家の夫人の元へ、現状を訴えに参じると、娘の婚約相手の凋落を嘆く柳夫人、娘を男装させると沈高とともに出奔させた（図7）。

鄧遠志の活躍：鄧遠志は、修行を終えて下山する途中、方善なる老人に出会う。彼は鄧石甫なる豪族に、借金のかたに娘を取られたことを嘆いていた。鄧遠志は事情を聞くと、鄧石甫の屋敷へ娘を取り戻しに向かう。鄧遠志は、一旦は敵に捕らえられるも、鄧石甫の妹である鄧秀蘭に救い出され、最後、崖から岩を落とすことで敵を殲滅させるにいたる（図8）。鄧秀蘭もまた兄を厭い、蘇州の伯父鄧良の元へ向かう。かたや鄧良は、象空なる和尚に命を狙われており、象空の思惑を知った鄧遠志、再び救出に向かい、彼を捕らえるに至る。この一件ののち、鄧遠志と鄧秀蘭は結婚する。



図6 沈万山はいいカモとなりました



図7 柳織文は男装し、沈高と故郷を離れました



図8 鄧遠志は敵を一網打尽にしたのでした

柳織文の計略：柳織文は、ともに逃げていた沈高が追っ手に捕らえられ、絶望のあまり首をくくろうとする。そこへ富豪の李義山が現れ、柳織文の命を救う。折しも通りかかった鄧遠志、事情を聞くと、義僕沈高を助けるべく救出に向かう。柳織文は男装のまま、姓を李と変える。柳織文の出奔の後、沈万山は妹の柳織霞と結婚するも、ばくち好きは止まらない。岳父柳子貞は、沈万山を沈家から追い出すべく、王化雨に扮装させて、沈家を幽霊屋敷に仕立てる。出ていく沈万山。ほどなくして現れた家の買い手は、なんと、李家の養子になった男装の柳織文であった。王化雨は柳織文らをも追い出そうと、柳織文の前に幽霊の扮装で現れるも、折良くやってきた鄧遠志に成敗されてしまう（図9）。柳織文は、沈万山が改心したかどうかを試すべく、使用人の巧玲瓏を遣わし、沈をばくち漬けにする。負け続ける沈万山。身ぐるみ剥がれた沈万山が、世を^{はかな}儚んで崖から身を投げようとしたとき、彼を救うべく現れたのは、英雄鄧遠志であった（図10）。

沈万山の改心：沈万山が連れてこられた先は、男装した柳織文の面前。沈は元の自分の家で、元の許嫁に下僕として使われることになる。しかし、水くみやらおまるの掃除やらが、名門出の沈に耐



図9 王化雨は鼻を削がれてしまいました

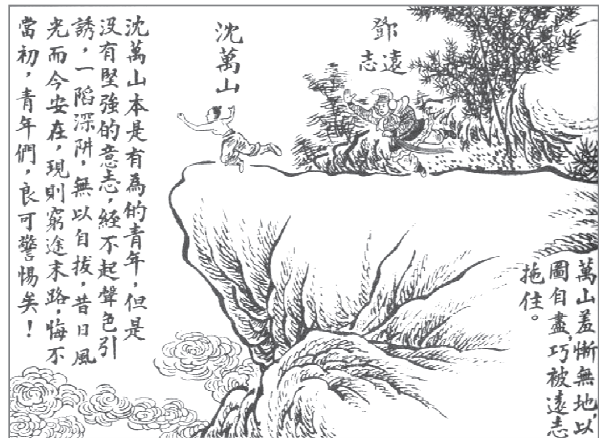


図10 沈万山はすんでのところで救われました



図11 壁は崩れて、中から聚宝盆が出てきました

えられるはずもなく、周りも次第に彼の凋落を口にするようになると、こんな惨めな思いをするくらいなら死んだ方がましと、沈万山、壁に頭から突っ込んだ。すると途端に壁は崩れ落ち、中から現れ出たのは、なんと金銀財宝を収めた大きな盆^{はち}(図11)。それはむかし沈高が、沈家の再興を願って隠し埋めた聚宝盆であった。同じ頃、糟糠の妻の柳織霞は病に倒れて死んでしまい、ついに沈万山は、もとの許嫁であった柳織文と結婚することになるのであった。

最後に物語は、沈万山が、朱元璋らの挙兵に当たって援助したこと、明の將軍・胡大海と義兄弟のちぎりを交わしたこと、都城の建設に金銭を供出したことなどを記し、沈が明の基礎を固めるその一翼を担った人物であることを示して幕を閉じる。

主要な登場人物が沈万山であることは言うまでもなく、物語は彼の凋落と再起を主軸に進んでいくが、鄧遠志と柳織文の役割もまた欠くことができない。鄧遠志は、誰かが危機に陥ったときに必ず現れ、その者を救うことで人々を繋いで行く。彼に助けられるのは、方玉梅、鄧秀蘭、鄧良、沈高、沈万山などの面々。一方の柳織文は、はじめこそ沈万山のそばで澄ましているが、出奔することで名前と役割を変え、その上で沈と再会することで、沈の再起とそれに伴う物語の団円を後押しする。

連環画『沈万山』は、こんなはなしが、息もつかせぬ速さで進んでいくのである。

『沈万山』の絵画表現について

連環画である以上、はなしを進めるための情報は、図版が多くを担うわけだが、『沈万山』はそこがめっぽう魅力的だ。上に沈曼雲の創作上の特徴を述べる際に、誇張と変形、滑稽などのことばに言及したが、『沈万山』からもそういったマンガ的表現を汲み取ることができる。以下に目に付くものを取り上げ、それがどんなものかを鑑賞することにしよう。

人物の造形について、ここにもまた芝居の影響が見て取れることを、まずはじめに挙げるべきである。人物の服まわりには、生地模様やら装飾品やらがこまごまと描き込まれており、これらの細かさと自然さは、おそらく、沈の子どもの頃の訓練のたまものでもあるだろう。

画面構成を言えば、ロングショットとクローズアップの移動が頻繁に行われ、そしてそれらが全体のメリハリをつけていることは、現在の映画やアニメーションのそれと同様である。

『沈万山』の物語は、建物内部で展開する場面も多いのだが、それらは決して狭苦しいものになっていない。それは、空間をなるべく閉じないように、きちんと描き込みがなされているからである。例えば、後方に月洞門や開いたドアを置いて奥の部屋を見せたり、手前に窓枠を描いたりしているコマが散見されるのだが、これらは画面

を重層的に見せ、読み手に広い空間を想像させることに成功している（図 12、13）。



図 12 奥行きのある舞台①

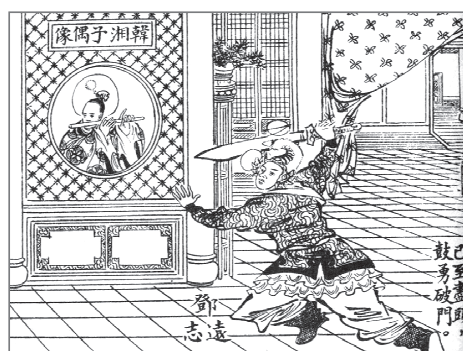


図 13 奥行きのある舞台②

クローズアップは、その多くがことばを添えられることで、個人の思惑を明確に示し、物語のポイントをわかりやすく伝えるコマとなっている（図 14）。老鴿と王化雨が悪巧みをするコマ、負けた時のサイの目のコマ、鄧遠志と鄧秀蘭との情を示すコマ（図 15）など、要所にこの種のクローズアップが、効果的に使われている。



図 14 沈家の行く末を案じる沈高

このように、描き手は空間設計や視点移動に気を配りながら、丁寧に物語を綴っていくのだが、ときおり現れる不思議な表現がアクセントとなっていることも見逃すことができない。例えば、鄧遠志が鄧石甫のボディガード石教師と闘う場面、途中八仙人の像が配置された部屋を通るが、それらの像と鄧遠志が同一画面に収まるとき、若干のシュールな様相を呈している（図 16、17。13 も）。



図 15 見つめ合う侠客カップル



図 16 ロバに逆さに跨がる張果老



図 17 トラに腰掛ける何仙姑

八仙それぞれの頭が「まる」で囲まれているから、生身の人間との描き分けは、一応なされていると言うべきだろうが、ロバに逆さに跨がる張果老や、トラに腰掛ける何仙姑と、鄧遠志が対峙する版面は、やはり読み手を軽く「くすぐる」類いのものであると言えるだろう。

そのシュールさはまた、沈家の財宝を盗もうと企む使用人の沈貴と沈富が、鬼の扮装をして人々を驚かせる場面（図 18）や、王化雨が沈家を幽霊屋敷に仕立てるべく大頭鬼のかぶり物をかぶって人々の前に現れる場面（図 19）などにも現れる。後者にいたっては、かぶり物の表情がときに変わるため、生身の人間のデフォルメされた姿のようにも見えるのである。生身の人間と像との境が曖昧であるために、読み手の側が勝手に、像を生身の人間と見なしてしまう状況が生まれていると言うべきだろうか。結果として、三頭身のオジさんに見える大頭鬼が、愛嬌たっぷりに動き回るようすからは、言いしれぬ「おかしみ」が醸し出されることになるのだが、このような滑稽さこそが、読み手を獲得する一因になっただろうことは、想像に難くないのである。

ことばにできないおもしろさ

さらに数点、味わい深い画面について、取り上げて鑑賞することにしよう。

連環画『沈万山』の中で、なんといっても驚かされるのは、英雄鄧遠志の乗る馬である。彼は初めは普通の馬に乗っているが、あるとき山道で、劣馬（野生の馬）に乗り換えねばならなくなる。劣馬の登場じたいは、それほど不思議なことではないだろう。なぜならそれによって、乗る者の技量が示せるからだ。ただし問題は、その劣馬が沈曼雲によって、いかに描かれたか、という点にある。



図 18 幽霊登場

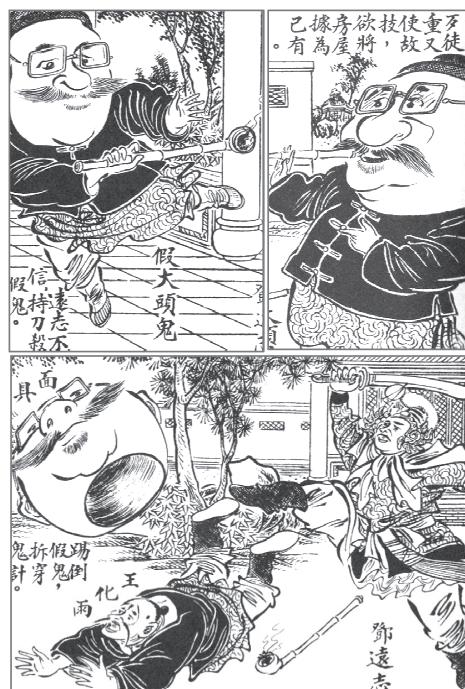


図 19 表情を変える大頭鬼

その馬はなんと、あろうことか、シマウマのカタチをとる(図 20)。しかも鳴き声は「^マ嗎嗎嗎~」。中華の英雄がシマウマに乗るなんて、破格すぎて、笑っていい箇所なのかどうか、もうわからない。なぜ劣馬の画像にシマウマを採用したのか、おそらく英雄の乗る馬であるからには、普通の馬であるわけにいかないということなのだろう。ならばシマウマは、白か黒かという制約の中での、苦肉の策ということになる。そういえば、沈曼雲の別の作品『玄奘西行』には、ゾウやゴリラ、ワニなどが登場するから、あるいは動物画の図録のようなものを保有していたのかも知れない。ともあれ、鄧遠志なる英雄は、この先、物語が終わるまで、ずっと、このシマウマに乗って現れることになる。



図 20 劣馬は馬にあらず

また、鄧石甫が鄧遠志によって矢傷を負われ、その傷が病んで顔が腫れ上がる場面(図 21)もまた、ぜひとも言及しておかねばならない。風船のように腫れ上がる顔は、彼の手にかかると、こんなに味わい深いものになる。右下のコマにある日の丸は、妹の鄧秀蘭に貼ってもらった膏薬。これにより痛みが治まったのだろう、腫れは引かないまでも、その表情は心なしか穏やかだ。

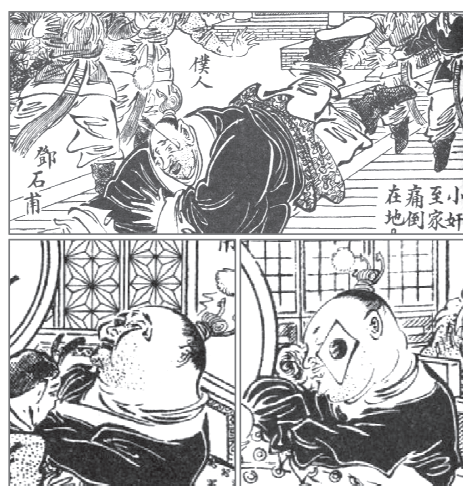


図 21 顔の腫れた鄧石甫

最後に、沈万山の墮落のきっかけとなる妓女遊びの場面から、彼が初めて妓館に泊まったときのようすを描いた一コマ(図 22)を見てみよう。悪い友達二人から「沈の兄さんや、ここのもてなしはどうだったかい？」と話しかけられ、帽子だけつけてひょっこりと顔を出す沈万山。頬を染める沈の決まり悪そうな顔と、両手でつまむカーテンのひだりがたまらない。青年男子の初体験をこんなに丁寧に描いた連環画なんて、他にあるだろうか。墜ち行く若者の未熟さを冷たく見下ろすのではなく、むしろあたたかく眺め、ほほえましく描き出す書き手の、その懐の深さが伝わるような一枚であると言える。

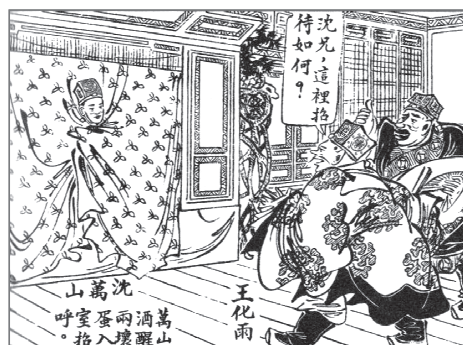


図 22 大人の階段を昇る沈万山

「退廃」としての煌めき

昨年夏の夏のこと、上海の書店で、連環画『沈万山』を初めて手に取り、ホテルの部屋で一人、一気に読み通したときの興奮と衝撃は、今も忘れられない。『沈万山』には、人間というものが、やや類型的にはあるが、しかしきちんと描かれている。のみならず、民衆の好むような、ある種の下品さが適度に織り込まれ、ぼくらを心地よく笑わせるのだ。

『沈万山』は、良い人間も悪い人間も、きわめて元気が良い。精一杯にそれぞれの役割を全うする。書き手の筆はそれらを描くに際して、少しのためらいもない。ぜいたくに描き込まれた装飾品や調度品、そして、多様に変化する人物造形や版面構造などが、ぼくらの目を存分に楽しませる。むろんそこにも、嫌みや衒いは微塵もない。ぼくら読み手は、優れた職人の技術に気持ちよく乗せられて、ページを繰る手ももどかしく、時に出くわすヘンテコな絵に吹き出しながら、ジェットコースターの快感に酔いしれるのである。

沈曼雲は、上にも述べたように、新中国になってからは連環画製作から退いてしまう。党の作った美術の学校に入ったこともあるようだから、そこで党の意向にふさわしい図柄と題材の文芸を生み出すべく、再教育を施されたには違いないのだが、なんらかの理由で、新たな時代の絵師として歩み出すことはしなかった。そしてそれは、彼の画力の問題では、おそらくない。そういう絵師が当時、どのくらいいたのかはわからないが、そんな彼の思いとは無関係に、新しい中国は、新たな時代の作品を、大量に、バリエーション豊かに生み出して行くのである。新中国になって続々と現れる連環画の数々を、沈はどのような思いで眺めていたのだろうか。

ともあれ、連環画『沈万山』は、2012年に再版され、再び多くの読み手を得る機会に恵まれた。今後は、その書き手である沈曼雲にも、注目が集まって行くに違いない。本稿で語り尽くせなかった彼の作品の魅力については、また稿を改めて述べることにしよう。

¹ 沈曼雲絵画『沈万山』（葛振綱責任編輯、上海人民美術出版社、2012）を使用。初版は40年代後期、聯益社書局による出版（編者による「出版説明」参照）。沈万山および彼の物語については、『茶香室統鈔』巻4「沈万山」、朱恒夫「関于沈万三の叙事文学考論」（『明清小説研究』72、209-221頁、2004年第2期）を大いに参照した。そのほか、清水泰次「沈万三説話考」（『史観』第34-35合冊、86-101頁、1951）、鈴木正「沈万三説話の分析」（『史観』第72冊、2-36頁、1965）、戸華為「民間伝説と歴史記憶——以沈万三伝説為例」（『晋陽学刊』2004年第5期、55-58頁、2004）などを合わせて参照した。近年の小説に呉恩培『巨商沈万三』（北京北岳出版社、1997。前年の連続ドラマ『沈万三伝奇』のノベライズ。2004年に勉誠出版より邦訳が出ている）がある。

² 『堅瓠集』は『清代筆記叢刊』（齊魯書社、2001）第2冊所収のものを使用。

³ 「聚宝盆」伝説およびこの種の財宝譚については、澤田瑞穂『金牛の鎖——中国財宝譚』（平凡社選書、1983）に詳しい。

⁴ [明] 謝肇淛『五雜俎』巻2（東洋文庫610、平凡社、1997）65頁。

